日本カナダ学会関西地区便り

(JACS Kansai Regional Newsletter)



第 105 号 2018 年 6 月 11 日 発 行 人: 大 石 太 郎 編 集 人: 大 岡 栄 美 eooka@kwansei.ac.jp

カナダ研究のさらなる発展に向けて

大石太郎 (関西学院大学)

このたび、佐藤信行会長による新体制のもと、水戸考道会員に代わり、関西地区担当理事を仰せつかりました。これまで活発な活動を続けてきた関西地区のたすきを受け継ぐにあたり、改めて身の引き締まる思いです。私が日本カナダ学会に入会した 1990 年代後半以降をふりかえっても、草野毅徳、杉本公彦、下村雄紀の各会員を会長として輩出したことからもわかるように、関西地区のカナダ研究者は日本のカナダ研究の一翼を担ってきました。これまでの伝統を継承しつつ、さらなる発展に向けて、カ不足を顧みず、少しでも貢献できるように努める所存です。

さて、カナダ研究に限らず、日本の学術研究がおかれている状況は芳しいものではありません。少子・高齢化の進行はもとより、日本の大学の将来が見通せない現状において、大学院に進学する若者はあまり多いとはいえず、研究者の高齢化が進んでいます。また、大学に所属する研究者はさまざまな業務で多忙となり、定例の研究会に出席する余裕を失いつつあります。しかし、カナダ研究のさらなる発展を目指すなら、やはり日本カナダ学会の活動を活発化していくほかになく、日常的に集まりやすい地区活動は重要な役割を担っているといえます。カナダ研究の研究者を養成する講座が国内には実質的に存在しないことに加え、研究者を輩出してきた大学院をもつ研究中心型の大学に勤務する会員ばかりではないなかで、会員の増加は容易ではありません。ただ、幸いにもカナダは語学留学先として人気があり、その経験によりカナダに興味を抱く若者は少なくないと思われます。また、在外研究先としてカナダの大学・研究機関を選ぶ非会員の研究者も少なからずいることでしょう。これらの人々にとって、地区活動はカナダ研究を本格化させる入り口になりえます。そこで、

地区活動をこれまで以上に活発化し、こうした人々に参加をよびかけることにより、カナダ 研究の研究者層を厚くしていきたいものです。

地区活動の中心は、年数回の研究会と、先輩方のご尽力によりすでに 100 号を超える伝統を誇るニューズレター『関西地区便り』です。『関西地区便り』は、101 号から編集業務を引き継いだ大岡栄美会員が引き続き編集人を務めます。会員の皆様にご協力を賜り、紙面をより充実させることにより、関西地区の研究者の交流に寄与することが期待されます。そして、研究会には多くの会員のご参加を賜り、日本のカナダ研究のさらなる発展にお力添えをいただけますと幸いです。よろしくお願いいたします。

【大石太郎氏 プロフィール】

東京都立大学大学院理学研究科博士課程修了、博士(理学)。モントリオール大学地理学教室博士研究員(日本学術振興会海外特別研究員)、琉球大学法文学部講師・准教授を経て、現在、関西学院大学国際学部教授。専門は人文地理学。主要論文に「カナダの英語圏都市におけるフランス語系住民の言語維持とフランス語系コミュニティの発展」『地学雑誌』第115巻第4号(日本カナダ学会研究奨励賞優秀論文賞受賞)、主要著書に『世界と日本の移民エスニック集団とホスト社会』(明石書店、分担執筆)など。

 $a_{\Lambda} a_{\Lambda} a_{$

Canadian Researchers in KANSAI

Jeffrey Boase (University of Toronto)



I am an Associate Professor in the Institute of Communication, Culture, Information and Technology and the Faculty of Information at the University of Toronto. This spring I am honoured to spend a semester teaching and conducting research at Kwansei Gakuin University as a Visiting Professor in the School of Sociology. I have the good fortune of being hosted by Professor Kazunori Inamasu, with whom I am collaborating on a new research project, along with Professor Asako Miura, and NTT Communication Science Labs Researcher Naomi Yamashita.

My research focuses on the implications of communication technologies — such as mobile phones and social media — for personal networks, and the exchange of support and information within personal networks. I have studied this topic in Canada, Japan, the United States. Much of my research has taken place in Japan and the United States, because I completed a two-year Postdoctoral position at the University of Tokyo and then worked for nearly four years as an Assistant Professor at Rutgers University. However, since returning to Canada in 2012, I have focused my efforts on collecting data in Canada. I am pleased to spend some of my time in Japan this spring analyzing this data for the first time.

The data that I have recently collected in Canada is rather unique. In additional to having respondents complete survey questionnaires and in-depth interviews, many of the respondents also agreed to install a smartphone application that I designed to collect specific information from their phones' calling and texting logs. I designed this application to protect respondent privacy, and for this reason the application does not collect phone numbers, names, message content, or other information that could be directly linked to the respondents or their contacts. Moreover, respondents were informed in detail about how the application worked before agreeing to install it on their smartphones.

The data that this application provides is vital to understanding communication patterns in Canada. It is difficult for respondents to remember and articulate their communication behaviours, especially over long periods of time and with multiple types of relationships. With this logged data I am able to understand the patterns of calling and texting within personal networks over long periods of time. This application is among the first of its kind to provide access to this useful information while respecting the privacy of consenting participants.

This application was further designed such that participants could select particular individuals from their address books and calling logs in response to on-screen survey questions. Using this method, we asked Canadians to identify several types of relationships that provide important support and information. I am eager to analyze this data and learn how mobile phones have been used to maintain contact with these various types of relationships in Canada. I have also collected similar data in Japan and the United States with my collaborator Professor Tetsuro Kobayashi. My long-term goal is to discover how Canadians are unique (and similar) to those living in Japan and the United States, in regards to the composition of their personal networks, the exchange of information and support within these networks, and their use of communication technology.

Bio: Jeffrey Boase is an Associate Professor in the Institute of Communication, Culture, Information, and Technology and the Faculty of Information at the University of Toronto. He received my Ph.D. from the Department of Sociology at the University of Toronto, during which time he spent a year at the Harvard University while on a predoctoral fellowship at the National Center for Digital Government. After completing his Ph.D. he spent two years working as a postdoctoral researcher in the Department of Social Psychology at The University of Tokyo.

His research focuses on the relationship between communication technology and personal networks. He is particularly interested in how emerging technologies such as smartphones and social media platforms may enable or hinder the transfer of information and support within personal networks. His research takes an international approach to this topic by examining and comparing personal networks and technology use in several countries, primarily Japan, the US, and Canada. In recent years he has begun to incorporate digital trace data (so-called "Big Data") into his project designs, merging it with more traditional survey and interview data.

私の教室から in 関西

河原典史(立命館大学)



学部生のときから、私は近代における漁村の変貌に関する歴史地理学を学んでいました。院生・助手になると瀬戸内海から対馬、やがて植民地朝鮮の済州島への移住漁民の研究を始めました。そのようななか、2001年にバンクーバーにあるブリティッシュ・コロンビア大学へ、1年間の学外研究の機会を頂きました。ところが、日本・カナダの両方で「今からスティーブストンで、日本人漁民のことを調べる意味があるの?」と、よく言われました。そのとき、お世話になった元・和歌山県人会会長から、彼の父がバンクーバー島西岸の開拓者の1人であること

を教えていただきました。つまり、スティーブストンから BC 州各地の漁場・漁村開拓をした移住漁民の研究は、これまでの研究の延長上として発展させたものです。

やがて、バンクーバー島東岸の塩ニシン製造業、クィーン・シャーロット諸島(ハイダ・グワイ)の捕鯨業に携わる日本人移民へと研究は広がりました。さらに、2008年の2度目

の学外研究を経て、2世以降の漁業からガーディナー(庭園業・造園業)への転業や、契約移民として渡加した初期移民のサケ缶詰産業への転入など研究は展開しています。つまり、私のカナダ研究は、漁業を中心にした歴史地理学研究の1つなのです。おかげさまで(?)2014年には、映画『バンクーバーの朝日』の資料提供・監修・パンフレットの執筆の機会を頂きました。今後とも私の拙い研究が多くの方々にお役に立てれば幸いです。

【河原典史プロフィール】

立命館大学文学部地理学科地理学専攻卒業、立命館大学大学院文学研究科地理学専攻博士後期課程単位取得退学。現在、立命館大学文学部教授。専門は歴史地理学。おもな業績として、河原典史編著『カナダ日本人漁業移民の見た風景―前川家「古写真」コレクション―』、三人社、2013年。河原典史・日比嘉孝編著『メディア―移民をつなぐ、移民がつなぐ―』(と共編著)、クロスカルチャー出版、2016年。河原典史編著『カナダ日本人移民の子供たちー東宮殿下御渡欧記念・邦人児童写真帖―』、三人社、2017。河原典史・木下昭編著『移民が紡ぐ日本―交錯する文化のはざまでー』、文理閣、2018。

==関西地区 春の研究会のお知らせ==

日 時 : 2018年6月16日(土) 14:00~17:00

場 所 : 関西学院大学 G 号館 107 教室

兵庫県 西宮市 上ケ原一番町1-155 (阪急今津線甲東園駅下車、バス5分)

注意事項

上が原キャンパスへの交通アクセスは

http://www.kwansei.ac.jp/pr/pr_000374.html をご参照ください。

キャンパスマップは

http://www.kwansei.ac.jp/pr/pr_001086.html です。

◇ 講演者とテーマ:

発表1 「母語は生きるカーカナダのろう者と日本のろう者を比較してー」 報告者 伊藤泰子(名古屋学院大学)



【伊藤泰子氏 プロフィール】

2000 年、岐阜聖徳学園大学大学院国際地域文化専攻修了。2007 年、名古屋学院大学大学院 英語学専攻修了。2011 年、名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士後期課程満期退学。現在、名古屋学院大学・愛知工業大学の非常勤講師。研究論文は「カナダ多文化主義社会のろう教育」(2004 年カナダ教育研究 No. 2)、「ろう者と聴者の共生 ニューカマーの子どもとろうの子どもの類似点から」(2005 年、多文化共生研究年報第2号)「聞こえない人のアイデンティティ」(2008 年、

名古屋市立大学院『人間文化研究』第10号)、「聴覚障害を持つ生徒への英語教育」(2007年、名古屋学院大学院修士論文)

発表 2 Canada is back!? トルドー政権のこれまでの外交政策を振り返って報告者 木村裕子(関西学院大学、オタワ在住)



【木村裕子氏 プロフィール】

関西学院大学国際学部および国際教育・協力センター非常勤講師。関西学院大学総合政策学部卒業、ビクトリア大学修士課程修了。カナダ国際開発庁にて日加平和構築プログラム及び日加 NGO 協調プログラムに携わったのち、在カナダ日本国大使館専門調査員を務める。専門分野はカナダ外交政策、カナダ政治、日本カナダ関係。

発表 3 "Personal Networks and Communication Technology in Canada."

報告者 Jeffrey Boase (University of Toronto)

* Jeffrey Boase 先生の Bio は 4 頁参照。

==関西地区 春の懇親会のお知らせ==

上記研究会の開催される 6 月 16 日 (土) 夜 6 時から、懇親会を阪急電鉄・西宮北口駅周辺 にておこないます。会費は 5,000 円程度の予定です。ぜひご予定にお加えください。

-関西地区秋の研究会「カナダ&日本:依存なき外交」のご報告=

去る 2017 年 11 月 25 日 (土) に関西学院大学 G 号館にて、同大学が毎年実施している Annual Canadian Studies Seminar と合同で JACS 関西地区の秋の研究会が開催されました。今回のテーマは久しぶりにカナダと日本の外交でした。講演者は Mackenzie Clugston 元駐日カナダ大使・現在、同大学教授、長年カナダ外交を研究されてこられた Thomas Keeting アルバータ大学名誉教授・2017 年秋学期関西学院大学カナダ研究客員教授そしてもうおー人は本学会と姉妹関係にある Japanese Studies Association of Canada (JSAC) 会員・若手日加関係史研究者で当日、文部科学省招聘・神戸大学大学院法学研究科・研究生 Jason Butters 氏でした。

同研究会の当日は東京でカナダ教育学会の年次研究大会が行われていたこともあり、参加人数は少なかったが残念でした。が、Clugston 先生は、元大使という実務家からの立場から、Keeting 先生はカナダ外交の研究者としての視野から、また Butters 氏は、日加関係史を学ぶ若手研究家として講演をしてくださいました。それぞれ別な視野からこの2カ国間問題に光を当ててくださり、これまた新鮮な日加関係の理解に繋がりました。ご講演してくださった皆様、ありがとうございました。その後少人数でしたがいつものように懇親会を開催し、大いに盛り上がりました。今回来れなかった会員の方々次回はぜひご参加ください。なお2018年度より研究会担当は大石太郎会員となります。今まで大変お世話になりました。ありがとうございました。今後ともの引き続きご支援のほどよろしくお願い申し上げます

(文責 水戸考道)

2018年度日本カナダ学会関西地区研究会・報告者募集について

本学会関西地区では今後も随時、研究会を開催する予定です。皆様からのご報告を募集いたしますので、報告ご希望の方は大石(toishi@kwansei.ac.jp)あてにご連絡ください。日時はご相談のうえ、決定いたします。多くの皆様からのご報告希望をお待ちいたしております。

(関西地区担当理事 大石太郎)

関西学院大学 社会学部 大岡栄美

(mail:eooka@kwansei.ac.jp, tel: 0798-54-4546)

〒662-8501 兵庫県西宮市上ケ原一番町1-155

関西地区事務局

編集後記

『日本カナダ学会関西地区便り』第 105 号を皆様のお手元にお送りさせていただきます。 関西地区会員の皆様の交流に役立てていただければ幸いです。また今号から新たに関西地 区担当理事になられた大石先生とニューズレターを発行してまいりたいと思います。101 号 からご一緒させていただきました水戸先生におかれましては、ご尽力本当にありがとうご ざいました。今後とも関西地区の発展のためどうぞよろしくお願い致します。

大岡栄美 (関西学院大学)